

## ■今月の特選句

2018年3月

**入試絵馬ぶつかり合いて春疾風**

横山喜三郎

受験は人生の第一関門。絵馬による受験の代理戦争が勃発。日本はまだまだ学歴社会やからね。俳人になれば学歴など関係ないんだけどね。

**手袋をはめ不器用な人となる**

堀川明子

先入観や常識を覆すと滑稽句ができる。しかし、できれば意図的にでなく素直に感じたままを句に詠めれば最高である。堀川さんは直観俳人。

**着膨れて着信音に届かぬ手**

井野ひろみ

「携帯に出ぬはおそらく着膨れだ」「着膨れと言いつける寒の内」。もともと電話嫌いの人は、夏になっても「水着着てスマホの電源オフとする」。

**杉花粉どうして私を苛めるの**

梅岡菊子

俳句は擬人化でつくと面白い句になる。「杉花粉過敏な女に目をつける」「花粉症の犯人とされ杉花粉」「判決は湧水強制の罪杉花粉」。

**西成の寒風掟のやうにかな**

田中 勇

「掟」がいいね。「西成に住んで冷たき北の風」「寒風を細くしたのが隙間風」「西向きに吹いても多分北の風」「西成に世間の風は冷たいか」。

**補聴器の感度良好風邪の声**

白井道義

感度良好と言っておきながら、風邪声で裏切って滑稽句となった。補聴器は、良い声、楽しい話よりも、悪口や噂話を聞く時に欠かせないね。

## ■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

- したくないものの一つに日向ぼこ  
・・・とりあえずする日向ぼこなり 久我正明
- 研ぎ澄ます五感六感六花  
・・・雪と一体化した一句だ 井口夏子
- クレーンの長首風花に戸惑っている  
・・・食べたいのかも知れませんねえ 鈴木和枝
- 人の手を借りずアーチをゆきやなぎ  
・・・手伝つちや駄目自分で作るさ 山本 賜
- お隣は大吟醸の花筵  
・・・飲んでみたくて盃の交換 柳村光寛
- 鯛焼の話に尾ひれ付きにけり  
・・・餡子たつぷりはみ出してゐる 工藤泰子
- いかのぼり風のおだてに乗せられて  
・・・乗せられてより乗りたがるだろ 稲葉純子
- 絵かるたの下剋上なる天下とり  
・・・根回しをして一気に責める 柳 紅生
- 遠くて悩む大寒の外厠  
・・・尿瓶を使う齡じゃないから 桑田愛子
- 雪靴を覆いて三人とも転ぶ  
・・・可笑しいときはみんなで笑え 赤瀬川至安
- 襖絵のうさぎは耳をぴんと立て  
・・・おそらく耳は疲れきつてる 小林英昭
- かたちだけ三回叩き鍛冶始  
・・・本番ならば力の限り 伊藤浩睦
- 屁をひつて皆だんまりの炬燵かな  
・・・みんなで屁れば共謀罪に 田村米生

## ■今月の滑稽句

- |                         |       |
|-------------------------|-------|
| 神様の⑧の夜這い御神渡             | 青木輝子  |
| 【佳作】 高齢化背負うスタート入学児      | 青木輝子  |
| 入学児未来で背負う荷が重い           | 青木輝子  |
| 【佳作】 立春を待ちをるや祭ひとつ       | 青山桂一  |
| 寒風に群鴉の声のいや増せり           | 青山桂一  |
| 高架道走る里なり寒風裡             | 青山桂一  |
| 大寒の中を出掛けてそのまんま          | 赤瀬川至安 |
| 【佳作】 足袋のまま革靴覆いて仕舞ひけり    | 赤瀬川至安 |
| 良明の名で不良せし暗き春            | 荒井良明  |
| 爪に色を塗りて春待つ少女かな          | 荒井良明  |
| 【佳作】 針金細工の蝶に初蝶とまりけり     | 荒井良明  |
| 白菜のやんちゃ藁もて閉ちこめる         | 井口夏子  |
| 【佳作】 三寒の四温は流れ四寒かな       | 井口夏子  |
| 寒垢離や水温零度の極楽湯            | 池田亮二  |
| 【佳作】 犬年じゃけん犬語のけいこなんちゃって | 池田亮二  |
| 節分の福は大声鬼小声              | 石塚柚彩  |
| 【佳作】 まだ二月今年の誓い早挫折       | 石塚柚彩  |
| 七日間ピロリ菌退治寒明くる           | 石塚柚彩  |
| 冬ノハエ見バエインスタカメラバエ        | 泉 宗鶴  |
| 【佳作】 無言に咲けや春場所の貴乃花      | 泉 宗鶴  |
| ピヨンちゃんやちゃんちゃんこでは間に合わず   | 泉 宗鶴  |
| 十万円金貨を投げて初詣             | 伊藤浩睦  |
| 【佳作】 若者のやばい飛び交ふ初日の出     | 伊藤浩睦  |
| 休肝日沸かして忘る湯割り哉           | 伊藤洋二  |
| 初鳩の音痴治してをるらしく           | 伊藤洋二  |
| 【佳作】 欲の皮突つ張る時の寒灸        | 伊藤洋二  |
| 【佳作】 十二月届かぬところにある埃      | 稲沢進一  |
| 小春日やサプリメントはビタミンB        | 稲沢進一  |
| 桜餅背中合はせの二人かな            | 稲沢進一  |
| 梅がほらほらちらほらと二三輪          | 稲葉純子  |
| 【佳作】 俗世の空気吸ひ始め露の臺       | 稲葉純子  |

- 【佳作】 つい忘る四人目の孫初節句  
冬帽子徘徊の如ウオーキング  
井野ひろみ  
井野ひろみ
- 【佳作】 スイーツが私を誘惑春隣  
モナリザに見られて冬の孤独かな  
節分の福を求めて歩きけり  
上山美穂  
上山美穂  
上山美穂
- 枕持て添ひ寝に行かん雛の夜  
【佳作】 南から攪り吹けば山笑ふ  
膝へ打つ春の注射や加齢です  
氏家頼一  
氏家頼一  
氏家頼一
- 雛あられパワーショベルの手でつかむ  
【佳作】 一家族養ひし針の供養かな  
梅岡菊子  
梅岡菊子
- 空の上までぶらんこの子らの声  
雪しんしん夫なき吾は本を読む  
【佳作】 どうか雪や犬も炬燵に丸くなり  
梅野光子  
梅野光子  
梅野光子
- 咲き通す隣りの梅も見飽きたる  
【佳作】 春の猫二夕夜泊ってゆきにけり  
つねながら目刺の頭焦げてゐし  
越前春生  
越前春生  
越前春生
- くるくると子等くるくると初抹茶  
【佳作】 初夢を独り占めして忘れけり  
ビル一つ歯抜けのごとく冬銀座  
太田史彩  
太田史彩  
太田史彩
- 【佳作】 若者も背中丸めて白い息  
飛行機雲は一直線や小春の日  
お城下に白装束の冬將軍  
小笠原満喜恵  
小笠原満喜恵  
小笠原満喜恵
- 【佳作】 人間の進化の果ての海鼠かな  
線香が尽きれば消える雪女郎  
小川鈍太  
小川鈍太
- 巣鴨まだ暮れずバレンタインの日  
春の風邪うつしうつされ老い二人  
【佳作】 納税期足の踏み場もなき茶の間  
加川すすむ  
加川すすむ  
加川すすむ
- 緋の蕪お腹の中まで染まるかな  
【佳作】 ミカン剥くための親指爪切らず  
この道や車千台雪泊まる  
加藤澄子  
加藤澄子  
加藤澄子
- 【佳作】 薄氷を眺める人と壊す人  
同棲は海鼠にまづは慣れてから  
久我正明  
久我正明
- 【佳作】 いつせいに空を散らかす百合鷗  
工藤泰子

- |  |                         |
|--|-------------------------|
| あと言へどうんともすんとも炬燵猫   | 桑田愛子                    |
| 【佳作】 人生にリセットボタン無くて雪  | 桑田愛子                    |
| 【佳作】 寝返りにとくに意のなき雪明り<br>新婚のふたりはすでに冬ごもり                      | 小林英昭<br>小林英昭            |
| 賀詞交歓や一とこせいの伊勢音頭<br>特選の代理受賞や初句会                             | 佐野萬里子<br>佐野萬里子          |
| 【佳作】 参道に神馬の糞や初見参   | 佐野萬里子                   |
| 【佳作】 ときめきもよろめきもある春ならば<br>うすらいや男の価値もミリ単位<br>鮫肝をキモい奴だといふ女    | 下嶋四万歩<br>下嶋四万歩<br>下嶋四万歩 |
| 【佳作】 どんど焼き竹爆(は)ず鬱憤晴らすかな<br>日向ぼこ濡れ縁婆のカフェテラス<br>空っ風妻の化粧の剥れ落つ | 壽命秀次<br>壽命秀次<br>壽命秀次    |
| 【佳作】 言ひ分はあれどだんまり女正月<br>マスクした方が美人と手前味噌                      | 白井道義<br>白井道義            |
| 冬の蝶三名湯の裏通り   | 鈴木洋子                    |
| 【佳作】 寒雷や産声麻醉の夢の中   | 鈴木洋子                    |
| 知恵の種出てくる出てくる金柑の尻   | 鈴木和枝                    |
| 【佳作】 腹いっぱい種抱えすまし顔の金柑                                       | 鈴木和枝                    |
| 襟巻し郵便局へ作品を<br>冬籠課題スラスラ付せん貼り                                | 鈴木哲也<br>鈴木哲也            |
| 【佳作】 眠る前靴予防のスキンケア  | 鈴木哲也                    |
| 許します一度だけならこの寒さ<br>飼い猫の御八つはここよ寒明ける                          | 高田敏男<br>高田敏男            |
| 【佳作】 大相撲勝負に寒さ残りけり  | 高田敏男                    |
| 雪搔きの次世代デビュー遅々として<br>マスクとらぬ歯科医の瞳美しきかな                       | 高橋きのこ<br>高橋きのこ          |
| 【佳作】 啓蟄や老人会よりジム通ひ  | 高橋きのこ                   |
| 【佳作】 負けるまい老人たちの寒の内<br>日向ぼこ猫と女のじゃれてをり                       | 田中 勇<br>田中 勇            |

雪の朝天井知らずの血圧計 一年毎に三年日記買ふ夫	田中早苗 田中早苗
【佳作】この婆に恋い焦がれたるゐのこづち	田中早苗
着ぶくれて女子駅伝を応援す	田村米生
【佳作】御慶受けお人ちがひと言ひだせず	田村米生
隣席の寝息のリズム初電車 初暦見て見ぬふりし次の干支 雪だるまイケメン越してにやけ顔	月城花風 月城花風 月城花風
流行性感冒こなして米寿迎へけり	飛田正勝
【佳作】お隣りの雪搔こなす米寿肩 大寒の南無妙法蓮華経かな	飛田正勝 飛田正勝
【佳作】迎へ撃つごとき形相大きくさめ 鳴くか鳴かぬかどつちかにせよそこは亀 ふらここや今さら恋といふたはけ	新島里子 新島里子 新島里子
俎板の魚氷に上る勘違い 竜天に登り損ねて松葉杖	西をさむ 西をさむ
【佳作】鷹化して鳩となるには核なき世	西をさむ
【佳作】白魚にごめんと手を打ち舌鼓 春立つも気温萎え折れ氷点下 積雪に負けビール泡潜めをり	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
縁起ものの漢(おとこ)くべたるどんどかな	原田 曄
【佳作】杉花粉四散禁止令に署名せよ 棒切をつかねて梅の苗木とや	原田 曄 原田 曄
蒲団から足の抜けずに遅刻する 東北の御一行さま鳥帰る	久松久子 久松久子
【佳作】白鳥のカメラ目線のポーズかな	久松久子
【佳作】あらすじのまとまりかけて春隣 祓ふべき邪は吾の中に鬼やらひ 義理なんぞいらぬ情欲シバレンタイン	日根野聖子 日根野聖子 日根野聖子
小正月掃除が好きになつてきた	藤森荘吉
【佳作】ピョンチャンつて兔のオリンピックですか 年賀状二通来る友増えてくる	藤森荘吉 藤森荘吉
雪搔きや節節悲鳴老いに鞭 いざ平昌アベもブラリと二月旅	細川岩男 細川岩男
【佳作】冬景色一夜で積もる難儀かな	細川岩男

- 【佳作】 手を繋ぎそこねてしまひ懐手  
懐の寒い奴さへ懐手  
堀川明子  
堀川明子
- 【佳作】 地球儀を回して春はどの辺り  
立春に待ったをかける寒波かな  
赤提灯寒吟行のつきあたり  
本門明男  
本門明男  
本門明男
- エステになるやほうれん草茹でし湯気  
ずっしり重し冬ごもりの猫抱けば  
松井寿子  
松井寿子  
松井寿子
- 【佳作】 蛇口より水のポタポタ凍てる夜  
松井まさし  
松井まさし  
松井まさし
- 【佳作】 関係者臍に疵持ち豆を撒く  
恋猫の後傷負っていま不良猫  
痴話喧嘩空に流して鳥帰る  
南とんぼ  
南とんぼ  
南とんぼ
- 【佳作】 背高クン君なら届く寒北斗  
お日さまがんばれ！冬将うごくぞ  
寒の底越えたら君の手を取ろう  
椋本望生  
椋本望生  
椋本望生
- QRコードに化けるバレンタインデー  
【佳作】 人の世の列につきたる鴨の列  
春眠や閻魔にばあーを出してみる  
村松道夫  
村松道夫  
村松道夫
- 三日はや褌つなげず箱根道  
事のほか熟柿を賞でむ妻ならば  
【佳作】 初夢や濃艶な師のラブレター  
百千草  
百千草  
百千草
- 雪化粧介護するものされるもの  
【佳作】 凍てつきに指先全部かまれおり  
大人でも甘えたくなるインフルエンザ  
森岡香代子  
森岡香代子  
森岡香代子
- 【佳作】 湯たんぼが好きでやつぱりアナログ派  
凍滝は完全黙秘のままである  
着ぶくれてふくら雀となりにけり  
八木 健  
八木 健  
八木 健
- 【佳作】 薄氷や美人薄命その通り  
蝌蚪の文字似たりよったり篆字らし  
恋猫と庄造と二人のをんな  
八洲忙閑  
八洲忙閑  
八洲忙閑

- |                      |       |
|----------------------|-------|
| 雛の間で我が家の姫がねんねする      | 八塚一青  |
| 【佳作】 巢燕が代々借りる軒の下     | 八塚一青  |
| 荒東風や急におへそを曲げている      | 八塚一青  |
| 【佳作】 恐竜の噛みつくさまに氷柱落つ  | 柳 紅生  |
| 武士道の廃れ鮫鱈切り刻む         | 柳 紅生  |
| 【佳作】 焼きたての美味し目刺の骨つかえ | 柳澤京子  |
| 晩年や呆けてなるまい木の芽和え      | 柳澤京子  |
| 春めくや主の憐みか視力増         | 柳澤京子  |
| 【佳作】 うたた寝のじきに大の字春炬燵  | 柳村光寛  |
| 春風や青年漁師急募中           | 柳村光寛  |
| 雪融けの水を待ちたる命かな        | 山下正純  |
| 通し矢の凍てつく空気射抜くなり      | 山下正純  |
| 【佳作】 雪背負ふ郷のナンバー走りをり  | 山下正純  |
| 【佳作】 半額のポインセチアを大切に   | 山本 賜  |
| 氷点下四度の庭の紅椿           | 山本 賜  |
| 仰いでも仰がなくても卒業す        | 横山喜三郎 |
| 【佳作】 行く春の廃校番や尊徳像     | 横山喜三郎 |
| 【佳作】 媼とは思へぬ差配溝浚へ     | 吉原瑞雲  |
| 花祭慣れぬ異国語自撮り棒         | 吉原瑞雲  |
| 徘徊にあらず腕振り青き踏む        | 吉原瑞雲  |